



隸嬢たちの放課後

テニス部員と図書委員長

北都凜

挿絵／尾髭丹

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



プロローグ	………	4	
第一章	狙われた令嬢の純潔	………	12
第二章	周到なる悪魔の姦計	………	59
第三章	恥辱の裸婦デッサン	………	107
第四章	テニスコートの悪夢	………	154
第五章	好きな人の目の前で	………	201
第六章	美少女隷従学園生活	………	247

登場人物

Characters

鹿島 理緒

(かしまりお)

小麦色の肌に黒髪が似合う2年生のテニス部員。勝ち気で正義感が強く、明るい性格。顧問の栗原雅人に恋心を抱いている。部活時に邪魔になるほど乳房が大きい。

篠宮 千鶴

(しのみやちづる)

黒髪ストレートロング、抜けるように白い肌に、眼鏡をかけた3年生。図書委員長のお嬢様。地味な印象とは裏腹に抜群のプロポーションをしている。目立つことが苦手です大人しくて控えめな性格。

大村 邦夫

(おおむらくにお)

39歳の美術教師。中肉中背で、荒々しい粗野な口調と性格をしたレイブの常習者。

栗原 雅人

(くりはらまさと)

教師2年目、23歳の体育教師でテニス部顧問。爽やかな好青年。

「濡らさないとディルドウが入らないだろうが。それとも乾いたマ〇コに突っこむつもりか？」

大村は下卑た声で囁き、膣口にそつと舌を差し入れてくる。そして浅瀬をゆっくり掻きまわされると、背筋がゾクゾクするような感覚が湧きあがった。

「あつ……い、いや……あつ……ンンっ」

廊下にクラスメイトたちがいるのに、淫らな声がとめられない。

（こんなの嫌なだけなのに……声、聞こえちゃう）

涙目になりながら、許しを乞うように首を左右に振りたくる。意思とは裏腹に、陰唇が小刻みにヒクついてしまう。まるで尿意を我慢しているときのような、くすぐったさをともしなう感覚が少しずつ大きくなっていく。

美術教師の繊細すぎるクンニリングスが、ロストヴァージンから一日しか経っていない少女の粘膜を巧みに刺激していた。しかし、性感が開発されていないので、理緒本人は送りこまれてくる感覚を快楽としては認識できていなかった。

「濡れてきたぞ。ほら、わかるだろう？」

舌を動かされるたびに、確かにヌチャヌチャと水っぽい音が響き渡る。

でも、本当に自分が濡らしたもののなのか、それとも男の唾液が弾けているだけなの

か判断はつかなかった。

そのとき突然、美術室のドアが遠慮がちにノックされた。

『大村先生、いらっしやいますか？』

廊下で待たされている二年B組の生徒たちが、とうとう痺れを切らしたようだ。すでにチャイムが鳴ってから十分以上が経っている。クラスメイトたちが不審がるのも当然のことだった。

「すぐに授業をはじめないと騒ぎになるぞ。どうするつもりだ？ 校長の耳に入ったら收拾がつかなくなる。写真の件も、すぐに発覚するだろうな」

再び椅子に座るようにながされて、理緒は嫌々ながらもデイルドウの上に腰を落とすしていく。

「こんなことさせるなんて……あうっ！」

膣口に硬い物が触れて、反射的に腰が浮いてしまう。それでも大村に目で強要されると、途中でやめることはできなかった。

（千鶴先輩のためだから……）

もう一度デイルドウの先端を割れ目にあてがい、ゆっくりと膝を折りはじめる。すると散々しゃぶられた恥裂が、ニチャッと湿った音を響かせた。

「や……は、入ってくる……ンンっ」

白い逸物の切っ先が少しずつ沈みこんでくるが、濡れているためか痛みはほとんど感じない。本物のペニスとは異なる無機質で冷たい物体が、想像していたよりも簡単に侵入してきてしまう。

「その調子だ。理緒のおマ○コが、ディルドウをどんどん呑みこんでいくぞ」

大村がからかうように声をかけてくる。悔しさがこみあげるがつつけるしかない。

（お尻にも入れられてるから……ああ、なかで擦れてる……）

肛門に挿入されたローターと、石膏製のディルドウが薄皮一枚隔てて擦れ合う。異様な感覚に翻弄されながらさらに腰を落とすと、擬似男根が一気になかほどもで入りこんだ。

「あくうっ……やだ……ンくっ、いやなのに……」

精巧に再現されたカリが、敏感な膣壁をズリズリと擦りまくる。おぞましい摩擦感に眉根を寄せるが、耐えられないほどではなかった。そのまま息を吐きだしながら膝を折り、ついに極太ディルドウを根元まで呑みこんだ。

「あうっ……」

膣内が擬似男根で埋めつくされ、思わず艶めかしい吐息が溢れだす。全身がねっ

りと汗ばみ、頭の芯が痺れたようになっていた。胸のうちは嫌悪感でいっぱいだが、なぜか媚肉は妖しく震えていた。

(こないやらしいこと……もういやよ……)

昨日、ヴァージンを失ったばかりなのに、こんな巨大な物を受け入れられる自分の身体が悲しかった。

「ずいぶん時間がかかったな。生徒を入れるから、これを羽織っておけ」

白いガウンを手渡されて、理緒は緩慢な動作で袖を通して裸体を隠した。

「間違っても股を開くなよ。ディルドウが見えたりしたら大変なことになるぞ。あとコイツは椅子の裏に貼っておくからな」

ローターとピンク色のコードで繋がっている小さな箱が、座面の裏側にガムテープで貼りつけられる。二穴に異物を押しこめられている理緒は、言葉を発する余裕もなく、虚ろな瞳で美術教師のやることを眺めていた。

大村がドアを開くと、十五分以上も待たされていたクラスメイトたちが次々と美術室に雪崩れこんでくる。みんなは理緒の姿を見て不思議そうに首をかしげながら、円形に並べられた椅子に着席していく。

(どうしよう……やっぱ無理よ……)

大勢の視線が自分一人に集中している。女子校だから大丈夫だと思っていたが、考
えが甘かったようだ。ガウンの上から見られているだけでも、お尻の穴と膣に施され
た悪戯を意識してしまう。

「今日は裸婦デッサンをしてもらう。頼んでいたモデルさんが来られなくなって困っ
ていたら、鹿島が立候補してくれたんだ。おまえたち、鹿島に感謝しろよ」

大村は白々しく苗字で呼びながら自分に都合のいい作り話をする、理緒のガウン
に手をかけた。

「ちょ、ちよつと先生、待ってください——きゃっ！」

次の瞬間、思わず小さな悲鳴が口をつく。いきなりガウンを剥ぎ取られて、クラス
メイトたちの前で一糸纏わぬ裸体を晒されてしまったのだ。

「やだっ……み、見ないでっ」

理緒は慌てて裸体を抱き締めると、肩を竦めて背中を丸めた。

美術室に驚愕のどよめきがひろがっていく。いくら女子校とはいえ、着替えのとき
でも同級生の身体をまじまじと見ることはない。それなのに、理緒はモデルとして全
裸を披露しているのだから、彼女たちが驚くのも無理はなかった。

「自分でヌードモデルをやると言ったのに、やっぱり恥ずかしいのか？ ほら、ちゃ

んとポーズを取らないと、デッサンができないじゃないか」

大村がみんなに聞こえるように、大きな声で話しかけてくる。

理緒は羞恥に染まった顔をうつむかせて、いやいやと首を振りたくった。胸と股間を必死に隠すが、そんなことをしても羞恥心が薄れるはずもない。

「おいおい困ったな。自慢のボディをみんなに見せつけてやりたいんだろ？　こういう機会がないと自慢できないから、つて言ってたじゃないか」

もちろんすべて嘘だが、なにも知らないクラスメイトたちは一様に戸惑った表情を浮かべていた。

「まさか、あの鹿島さんが自慢だなんて……」

「鹿島さん、そんなことを言う人じゃないはずよ」

「理緒って目立ちたがりだったのかな？」

囁く声が嫌でも耳に入ってくる。大村の発言で誤解されてしまったようだ。クラスメイトたちの目に、女特有の嫉妬が混ざりはじめて、理緒はますます小さくなってしまふ。

（違うの……これは無理やり……）

反論したいが、勝手な行動は許されない。千鶴はもちろんのこと、多くの卒業生た

ちを不幸にしてしまうから……。

「鹿島、ちゃんとポーズをとるんだ。胸を張って、両手を頭の後ろで組んでみる」

大村は教師ぶった口調で、卑猥なポーズを要求してくる。

当然ながら拒むことなどできるはずもなく、理緒は耳まで真っ赤に染めあげて、胸と股間を覆っていた手を離していく。お椀型で張りのある瑞々しい乳房と、陰毛がうっすらとしか生えていない恥丘が露わになってしまう。

「や……恥ずかしい……」

瞳を潤ませながらも、命令どおり両手を頭の後ろでしっかりと組んだ。

綺麗に処理された腋の下まで無防備に晒すことになり、激的な羞恥がこみあげてくる。仲のいい友人に裸体を見られるのは、大村を相手にするのはまったく異なる心境だった。憎しみや怒りがないので、恥ずかしさだけが際立ってしまうのだ。

（お願いだから見ないで……）

理緒の願いも虚しく、平均をはるかに上回るサイズのバストに、クラスメイトたちの好奇の視線が這いまわる。やがてクロッキー帳が配られて、いよいよ本格的にデッサンがはじまった。

微かに響く鉛筆の音が、裸体をスケッチされる羞恥を煽りたてる。高まる緊張感に

耐えきれず身を振ると、ずっぽり埋まっているディルドウが膣壁を刺激した。

「くうっ……」

かろうじて声は抑えたが、お尻の穴に挿入されているローターの存在感が大きくなってしまふ。幼さの残る横顔が桜色に上気して、全身の毛穴からいっせいに汗が噴き出した。

苦しまぎれに双眸を強く閉じるが、羞恥からは逃れられない。羨望と嫉妬の入り混じった視線が、透明に近いピンク色の乳首に絡みつくのがわかってしまふ。

「ねえ、ちよつと見て。あんなに綺麗な色をしてるわ」

「恥ずかしそうにしてるけど、内心はどうだか」

「大きな胸……あれを見せびらかしたかったのかな？」

興味津々といった感じの囁きが、美術室のあちこちから聞こえてくる。大村に黷られたことよりも、友人からの冷たい言葉が理緒の心を苦しめていた。

（ああ、いやよ……こんなの……）

見せ物にされて、今にも涙がこぼれ落ちそうになる。

と、そのとき、お尻の穴に埋めこまれているローターが、いきなり小刻みな振動をはじめた。痛烈な感覚が突き抜けて、顎がクンッと跳ねあがる。

「あうっ……くっ……ンンっ」

卑猥な声が漏れそうになり、慌てて咳払いで誤魔化した。しかし、淫具は動きをとめることなく、ブーンッという小さな音を響かせている。

(な……なんなの？ やだ……これ……)

まったく心構えができていなかったので動揺は激しい。肛門全体を揺さぶられる気色悪さに、思わず背筋が力んでしまう。すると膣内のディルドウが擦れて、痺れるような感覚がひろがった。

「うっ……くうっ……」

「鹿島、モデルなんだから動くなよ」

注意されて視線を向けると、美術教師の顔には妖しい笑みが浮かんでいた。

なにかを企んでいるのは間違いない。すると大村はスラックスのポケットから、なにやら小さなピンク色の箱を取り出した。それを理緒にだけ見せながら、ツマミをゆつくりとまわしていく。

「ひっ……」

途端にローターの振動が強くなり、こらえきれない小さな声が溢れだす。

どうやら肛門に挿入された淫具は、リモコンで操作できるらしい。理緒は慌てて下



唇を噛み締めると、不安げな視線を大村に送った。

「疲れたのか？ あと少しだぞ。モデルっていうのは意外と体力がいるだろう」

教師らしいことを言いながらも、その目の奥にはサディスティックな光が宿っている。とりあえずは大村の言葉で助けられたものの、責めはさらに苛烈さを増していくに違いない。

「鹿島には褒美をやらないといけないな。最後までがんばったら、俺が撮ったデジタルのデータをプレゼントしてやろう。芸術的な作品ばかりだぞ」

それは暗に千鶴と理緒の写真のことを言っているのだろう。理緒が最後まで耐え抜いたら、解放してくれるつもりなのかもしれない。

しかし、肛門に埋めこまれたローターを動かされると、思わず括約筋に力が入ってしまう。結果として膣のディルドウを締めつけることになり、むず痒いような妖しい感覚がひろがっていく。

（やだ、これって……もしかして……）

処女のまま味わわれた絶頂が、少しずつ確実に迫っていた。そんなはずはないと思いたい。でも、本当はずいぶん前から気づいていた。膣奥からジクジクといやらしい蜜が溢れて、ディルドウをぐっしよりと濡らしているのだ。

「んっ……んっ……」

ローターは相変わらず強烈な振動をつづけている。お尻の奥で響く低いモーター音が、みんなに聞こえてしまうのではないかと気が気でない。それでも奥歯を噛み締め懸命に耐えていると、大村が一本の絵筆を手に歩み寄ってきた。

「ちよつと色気が足りないな。みんなには、女性の内面から滲みだす艶をデッサンしてもらいたい。鹿島、表情が硬すぎるぞ。ほら、こうしたらどうだ」

唇の端に微かな笑みを浮かべて、首筋を筆で掃くようにくすぐってくる。思わず裸体をくねらせると、連動して下腹部にも力が入ってしまう。

「あうっ、やっ……んんっ」

排泄器官の粘膜をローターに揺さぶられ、膣壁を巨大なデイルドゥで抉られる。しかも、汗でヌメ光る裸体をクラスメイトたちに見られているのだ。

「なんだか……いやらしくない？」

「ど、どうということかしら……私にはさっぱり……」

「理緒、あんなに汗掻いてる……」

黙ってスケッチしていた女子生徒たちも、さすがに淫靡な雰囲気を感じ取り、美術室にざわめきがひろがっていく。

理緒も姦計に嵌まってヴァージンを失い、今もこうして排泄器官を嬲られている。同じような八方塞がりの状況にあるからこそ、彼女の気持ちを理解できた。

「栗原先生……し、失礼します」

千鶴はあお向けに転がっている雅人の股間にまたがり、和式便器にまたがるような格好になる。そして勃起した肉棒を掴んで、そつと淫裂にあてがった。

「はンンっ……」

さすがに罪悪感がこみあげてきたのか、千鶴の動きが一瞬とまる。と、間髪入れずに大村の怒声が響き渡った。

「なにをもたもたしてるんだ。そんな小さなチンポ、簡単に入るだろう」

そのひと言で千鶴は怯えたように肩を竦めると、首をいやいやと左右に振りながらも少しずつ腰を落としはじめる。

「はうっ……ン……ンン」

手で奉仕をしている間に濡らしていたのだろうか。意外にもスムーズに、肉棒の先端が媚肉の狭間に呑みこまれていく。

「くうっ……し、篠宮さん……駄目だ、そんなことをしたら……」

雅人は言葉では拒絶しているが、魅入られたようにじっとしている。まるで教え子

の媚肉と結合することを願っているかのようだ。

「ああんっ、栗原先生のが入ってきました……あっ……あっ……あっ」

「僕のチンポが、篠宮さんのなかに……ううっ」

やがて千鶴はぺたんこ腰を落として、雅人の肉棒を根元まで完全に受け入れてしまった。教師と女子生徒が——雅人と千鶴がすぐそこで繋がっているのだ。

「そ、そんな……千鶴先輩……」

片想いの先生と大好きな先輩が、目の前でセックスをしている。理緒にとってはあまりにもつらい現実だった。

「先生のが奥まで……はンンっ」

「くっ……いけないよ……し、篠宮さん……」

千鶴が艶っぽい溜め息を吐けば、雅人は快楽に呻きながらも論そうとする。しかし、肉体はすでに溺れはじめているようだ。どちらかが身じろぎするたび、結合部から又チャッという湿った音が響き渡る。

「どうだ、理緒。栗原の粗チンが千鶴のなかにずっぽり入ってるぞ」

「やだ、ひどい……こんな……ひうっ」

理緒はお尻の穴を指先で弄られながら、二人のセックスを見つめていた。いくら強

要されたことでも、目の当たりにすると複雑な気持ちになってしまう。

「うっ……ううっ……」

ヒップを高く掲げた情けない姿勢で、低く抑えた嗚咽をもらす。そのとき、指とも舌とも異なる硬いモノがお尻の谷間に触れてきた。

「やんっ……」

頬をベンチに押しつけた窮屈な格好のまま、恐るおそる横目で背後を確認する。すると、いつの間にか全裸になった大村が、いきり勃った剛根をヒップの狭間に押し当てていた。

「え？ ちょっと……なにを……」

またレイプされるのかと恐怖に頬をひきつらせる。しかし、理緒の予想は見事に裏切られた。

「ケツの穴を犯してやる。アナルヴァージンも俺がもらってやるよ」

「あ、アナルって……あうっ、いやっ」

意味がわからず困惑していると、大村は下卑た笑みを浮かべながらくびれた腰をがっしりと鷲掴みにしてくる。そして、じわじわ腰を進めて、剛根の切っ先をお尻の穴に沈みこませてきた。

「くひいいッ！」

たまらずヒップを揺すりたてて抵抗する。熱気を帯びた亀頭が、肛門を内側に押し開こうとしているのだ。肛虐という未知なる恐怖に、とてもではないがじっとしていることなどできなかつた。

「やっ、そこ……違う……ひッ、ひいッ」

さらに亀頭が前進して、お尻の穴が限界近くまでひろげられる。必死に身を振らせながら、後ろ手に拘束されている状態では逃れられるはずもない。

「ここでもいいんだよ。人間ってのはケツの穴でもセックスできるんだぞ」

「そんな恐ろしいこと……くひッ、駄目っ、苦し……ううっ、裂けちゃうっ」

身体を真つ二つに引き裂かれてしまいそうな恐怖に襲われる。全身の筋肉が硬直して、縄掛けされた両手をきつく握り締めていた。

「ようし、一気に入れてやる。痛いなんて最初だけだ。いくぞー！」

「ま、待って……あひッ、やめてっ、あひいいッ！」

大村が「フンッ」と大きく鼻息を吐いたのと、理緒がひときわ甲高い嬌声を放ったのはほぼ同時だった。ズボットという異様な感触とともに、ついに巨大な亀頭をお尻の穴に埋めこまれたのだ。

「うむむっ……や……く、苦し……くはっ」

金魚のように口をパクパクさせるばかりで、まともな言葉が出てこない。強烈な拡張感が肛門を痺れさせて、初めて体験する圧迫感が下腹部にひろがっていく。

「どうだ、少しは楽になったろう？ あとはケツの穴が太さに慣れれば、普通にアナルセックスができるようになるぞ」

大村は嬉しそうに話しかけてくると、尻たぶを卑猥に撫でまわす。たったそれだけで、太幹を咥えこんだ肛門にジクジクとした疼痛が走り抜けた。

「くうっ、お尻、壊れちゃう……ううっ、抜いてえ」

半開きになったままの唇から、情けない懇願と一緒に透明な涎が溢れだす。

熱くて硬い肉の塊が、お尻の穴にずっぽりと埋めこまれている。灼けたようにヒリつく感覚が、肛門レイプを嫌でも実感させていた。

確かに一番太いカリの部分が通過したことで痛みは軽減しているが、肛虐の恐怖と屈辱が消えることはない。しかも、お尻の穴を犯されている惨めな姿を、千鶴と雅人に見られているのがつらかった。

「ああ、理緒ちゃん……お尻まで……ひどいわ……」

「か、鹿島さん、まさか……そんなことを……ううっ」

騎乗位で繋がっている二人の声、嫌でも耳の穴に流れこんでくる。

瞳を閉じることはできるが、耳を塞ぐことはできない。視線を常に意識させられて、こらえきれずに大粒の涙がこぼれ落ちた。

「アナルヴァージンを捧げて嬉し泣きか？ 男冥利に尽きるねえ。いや、この場合は教師冥利ってやつか。クククッ」

大村は相好を崩すと、薄気味悪い笑い声を響かせる。そして、くびれた腰をぐっと掴み直した。

「それじゃあ、そろそろ本格的に楽しむか」

肛門に突き刺さった極太ペニス、ゆつくりと引きだされていく。排泄に似た感覚が湧きあがり、理緒はたまらず汚辱にまみれた嬌声を放っていた。

「ひッ……ひッ……や、やだ、これ……漏れちゃう」

実際には剛直を埋めこまれているので、排泄などしたくてもできない状態だ。しかし、太幹がズルズルと移動する異様な感覚は、テニスコートで脱糞させられた屈辱と恐怖を想起させた。

「やめて……ひッ……ひうッ、もうやめてえっ」

「ううっ、締まってるぞ、理緒のアナルが。ほれ、感じるだろう？」

肛門が捲り返されて、亀頭が抜け落ちる寸前まで後退する。そして、いったん動きをとめた剛根が、再びスローペースで埋めこまれてきた。

「ソッ……ンあぁっ……入ってくる、また……」

伸びきった菊門を、極太の肉竿で擦られる感覚は強烈だ。尻たぶが小刻みに痙攣して、背後で縛られた両手を強く握り締める。

「たまらなくなってきたみたいだな。初めてのアナルファックで感じるとは、なかなかのマゾっぶりじゃないか」

からかいの言葉を浴びせかけられても、反論する余裕などあるはずがない。排泄器官を犯されるおぞましきは想像を絶するほどで、十六歳の少女を肉体的にも精神的にもあつという間に追いつめていた。

（やだ、お尻なんて……千鶴先輩と栗原先生が見てるのに……）

不思議なことに痛みはまったく感じない。それどころか、妖しい感覚が芽生えそうな予感に怯えている。激痛に襲われているのなら、菌を食い縛って耐えればいい。しかし、剛根が抜き差しを繰り返すほどに、倒錯的な感覚が深まっていく。

「理緒ちゃん……もしかして、感じてるの？」

「肛門なんだぞ……まさか、そんなこと……」



千鶴と雅人の声が聞こえてくる。二人はいつしかねつとりと腰を使いながら、禁断の快楽を貪っていた。教師と教え子でも、所詮は男と女なのかもしれない。

「ああっ、見ないで……先輩……先生……見ないでください」

理緒は啜り泣きをもらしながら、頬をベンチにつけた姿勢で下唇を噛み締めた。

自分の醜態を見られることもつらいが、セックスしている二人の様子が視界に入ってしまうのが耐えられない。

「ああんっ、栗原先生……そんなに動いたら……あっ……あっ……」

「くうっ、篠宮さん……だ、駄目だ、締めつけないでくれ……ううっ」

大好きな先輩と淡い恋心を抱いていた先生が、卑猥に腰を振りたくっている。こんな光景を見せつけられて、シヨックを受けないわけがなかった。

「ひどい……ひどいよ……みんな……うううっ」

「あの二人、ずいぶん仲が良さそうだな」

理緒の気持ちを逆撫でするように、大村が腰を使いながら挿入してくる。

すべては男の計画どおりに進んでいた。千鶴の隷従度合いを深めるために、以前から気に入らなかった雅人を逆レイプさせる。これによって千鶴の奴隷化が急速に進み、教え子とセックスした雅人の教師生命は風前の灯火となる。

そして、「画像データを狙っている生意気で危険な存在——鹿島理緒を完膚なきまでに叩きのめす。まさに一石二鳥、いや一石三鳥の悪魔の計画だった。

「理緒、ケツが感じるんだろう？ 我慢することないぞ」

「や……感じてなんか……あふっ……やだ……」

理緒は掠れた声を絞りだして否定する。しかし、ねつとりと腰を使われてお尻の穴を犯されると、膣とは異なる強烈な感覚に襲われてしまう。

「んはっ……やめて……ひっ……ひっ……ひっ……」

「いい声で泣くじゃないか。ほれほれ、こういうのもいいだろう？」

大村が背中に覆いかぶさってきたかと思うと、耳もとに息を吹きかけながら囁いてくる。そして、様子を見ながら徐々に腰の動きを速めていく。

「いやっ、ひっ……駄目っ、そんなに動いたら……ひいッ」

こらえきれない喘ぎが、ひっきりなしに溢れてしまう。大きく張りだしたカリが、直腸壁を擦る感じがたまらない。目の前で行われている千鶴と雅人の禁断のセックスも、理緒の理性を揺さぶるのに一役買っていた。

「千鶴、感じてしまいます……あっ……あっ……栗原先生っ」

「篠宮さんがこんなに淫らだったとは……ううっ、すごいぞ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!